

桑野塾

桑野塾 検索

<http://deracine.fool.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。どなたでもご参加いただけます。それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第38回

2016年
5月28日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 早稲田キャンパス16号館 820号室

★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。

参加無料

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。



ガガーリンの表象——2つの映画作品を通して

報告者：佐藤千登勢

55年前、人類は初めて地球を見た

1961年4月12日は、ユーリイ・ガガーリンが世界初の有人宇宙飛行を成功させ、その名を歴史に刻むとともに、宇宙開発計画においてソ連がアメリカに、そして世界中にその威力を見せた日です。あれから55年、すでにソ連は崩壊し、かつてのような冷戦の構図も消滅し、アメリカとロシア、日本そしてヨーロッパ諸国の15カ国が共同で開発する国際宇宙ステーションの運用が常態となっている昨今です。しかしそれでもやはり、ガガーリンの偉業はロシアの人々を鼓舞し、愛国心を新たにしている要因であり続けているようです。一方で、また違った表象として捉え直す向きもあります。

ガガーリン生誕80周年を記念して、その偉業とロケット開発者セルゲイ・コロリョフの功績に光をあてた映画『ガガーリン』(パヴェル・パルホメンコ監督)が2013年4月12日にモスクワで公開されました。これに先立ち、有人宇宙飛行のために犠牲を払った人々のエピソードや心理的な動きをロケット打ち上げ6週間前から丁寧に辿った『宇宙飛行士の医者』(アレクセイ・ゲルマン・ジュニア監督)が2008年に公開されています。いずれも人類初の宇宙飛行をテーマとしていますが、その光と影の部分、まったく相反する観点からこの出来事を描いています。今回は、この2つの映画作品を通して、人類初の有人宇宙飛行55周年を静かに言祝いしたいと思います。

●佐藤 千登勢(さとう ちとせ) 法政大学国際文化学部准教授

映画『宇宙飛行士の医者』



映画『ガガーリン』

シクロフスキー(のため?)の「異化」再考

報告者：八木君人



マヤコフスキー(右)とシクロフスキー(1923)



ヴィクトル・シクロフスキー (1893-1984)

シクロフスキー(1916)

「異化」って、なんだ!?

大江健三郎が『小説の方法』でシクロフスキーの「異化」に言及してくれたお陰なのか、はたまたブレヒトの「異化効果」がある時代のある層にひろく受け入れられたお陰なのか、理由はよくわからないものの、「異化」という言葉は日本語としてもすっかり定着しているといつていいと思います。しかし、そのわりには、おおもとなった「シクロフスキーの異化」が一般にどのように理解されているのか、みな(あるいは自分は)彼のいわんとする異化を正しく理解できているのか、報告者はいつもよくわからなくなります。そのため、オンライン雑誌『チェマダン』でもそのことについて記したことがあります。

そんな報告者が「シクロフスキーの異化」を考える際に重視するのは、「運動」という契機です。それは、とりわけ小難しいニュアンスを孕みがちな「運動」ではなく、もっと素朴な「運動」です。今回の報告では、『チェマダン』で記したことを補足しながら、当時の身体文化との関連性や、この概念が提起された「手法としての芸術」が公にされた1917年当時のシクロフスキーのおかれた状況などに思いを馳せながら、いわば、いちばんフォルマリスト的でない方法で、「異化」を再考したいと思います。もちろん、それが「正しい」理解になるのかはわかりません。

●八木 君人(やぎ なおと) 早稲田大学文学学術院専任講師



シクロフスキー(1919) アンネンコフによる水彩

★オンライン雑誌『チェマダン』
<http://chemodan.jp/>